報道資料

京丹後市夢まち創り大学
今年度の計画について

令和５年７月２５日
京　丹　後　市

本市では、京丹後市夢まち創り大学事業として、参画大学と連携し市内各地域で大学生の地域活動の取組を支援しています。ぜひ、活動を知っていただきたく、今年度の活動計画をお知らせいたします。

１. 京丹後市夢まち創り大学とは

平成２７年８月１日より事業を開始した京丹後市夢まち創り大学は、市内の地域課題の解決や地域の活性化を目的に、地域と大学が連携し活動を行っています。商品開発、祭の運営・参加、農法の構築からオリジナル米の生産、観光 PR 動画やパンフレットの作成などの活動を展開しており、参加大学数は１７大学、のべ 9,285 人（令和５年３月 31 日時点）の学生がこれまで参加しています。

≪ 参 加 大 学 一 覧 ≫

- 福知山公立大学
- 立命館大学
- 龍谷大学
- 同志社大学
- 大手前大学
- 高崎経済大学
- 京都大学
- 京都府立大学
- 京都産業大学
- 花園大学
- 追手門学院大学
- 京都文教大学
- 京都外国語大学
- 佛教大学
- 大谷大学
- 同志社女子大学
- iU 情報経営イノベーション専門職大学

龍谷大　今里ゼミ
梅ジャムの試作・あじみ体験
（宇川アクティブライフハウス）

龍谷大　今里ゼミ
子どもたちとの総合学習
（宇川小学校）

2. 今年度の当初実施予定プログラム一覧

今年度は１１大学（１７プログラム）が実施を検討しており、すでに龍谷大学や京都産業大学、同志社大学等の学生がフィールドワークを実施しています。その他、iU 情報経営イノベーション専門職大学による市内小学生に向けたプログラミング教室を開催するなどの取組を予定しています。

No.	大学・学部	担当教職員	活動地域
1	龍谷大学　政策学部	谷垣岳人　准教授	大宮町三重・森本
2	龍谷大学　政策学部	今里佳奈子 教授	丹後町宇川
3	龍谷大学　政策学部	石原凌河　准教授	大宮町口大野
4	龍谷大学　短期大学部こども教育学科	野口聡子　教授	大宮町奥大野
5	京都府立大学　文学部	小林啓治　教授	和久傳の森
6	京都府立大学　教職センター	松村千鶴　特任教授	丹後王国ブルワリー・野木源
7	大手前大学　メディア芸術学部	谷村要　准教授	久美浜町蒲井・旭
8	大手前大学　メディア芸術学部	今福章代　教授	市全域（織物関連）
9	追手門学院大学　地域創造学部	安本宗春　講師 佐藤敦信　准教授	弥栄町和田野
10	京都文教大学	ﾌｨｰﾙﾄﾞ ﾘｻｰﾁｵﾌｨｽ事務局　多湖雅博	市全域
11	佛教大学	大東貢生　准教授	久美浜町湊地区
12	京都産業大学	若狭愛子　准教授	峰山町
13	大谷大学　社会学部	鈴木寿志　教授	網野町
14	大谷大学　社会学部	野村実　教授	市全域
15	同志社大学	泉川大樹　講師	丹後町間人
16	同志社女子大学　生活科学部	斎藤朱未　講師	市全域
17	京都外国語大学	宮口貴彰　講師	市全域

3. その他

夢まち創り大学を紹介する特設サイトの作成を予定しています。今後の各大学における取組やイベント実施情報について情報発信を行うとともに、報道資料の提供を行います。

【問い合わせ先】
担当：京丹後市市長公室政策企画課　渡利
電話：０７７２-６９-０１２０

京都府京丹後市

京丹後市夢まち創り大学
令和5年度　事業計画

関係人口と人材育成
～新たな地域連携活動の取り組み～

当初実施予定プログラム一覧及び各大学検討状況

№	大学・学部	担当教職員	活動地域
1	龍谷大学　政策学部	谷垣岳人　准教授	大宮町三重・森本
2	龍谷大学　政策学部	今里佳奈子 教授	丹後町宇川
3	龍谷大学　政策学部	石原凌河　准教授	大宮町口大野
4	龍谷大学　短期大学部こども教育学科	野口聡子　教授	大宮町奥大野
5	京都府立大学　文学部	小林啓治　教授	和久傳の森
6	京都府立大学　教職センター	松村千鶴　特任教授	丹後王国ブルワリー・野木源
7	大手前大学　メディア芸術学部	谷村要　准教授	久美浜町蒲井・旭
8	大手前大学　メディア芸術学部	今福章代　教授	市全域（織物関連）
9	追手門学院大学　地域創造学部	安本宗春　講師 佐藤敦信　准教授	弥栄町和田野
10	京都文教大学	ﾌｨｰﾙﾄﾞ ﾘｻｰﾁｵﾌｨｽ事務局 多湖雅博	市全域
11	佛教大学	大東貢生　准教授	久美浜町湊地区
12	京都産業大学	若狭愛子　准教授	峰山町
13	大谷大学　社会学部	鈴木寿志　教授	網野町
14	大谷大学　社会学部	野村実　教授	市全域
15	同志社大学	泉川大樹　講師	丹後町間人
16	同志社女子大学　生活科学部	斎藤朱末　講師	市全域
17	京都外国語大学	宮口貴彰　講師	市全域

令和5年度　事業計画

＜既存プログラムの充実・発展と新たな形の事業スキームの推進＞

行政区等の地域が受入主体となるだけではなく、企業や団体、個人が受入主体となる形や、市側からミッションを提示し、大学や学年の垣根を越えて参加希望者を募る形など、新たな形の事業スキームに取り組むことを推進し、地域と大学の間でのつながりだけでなく、市内事業者、関係団体、市内高校生、各市民局とも密に連携することで、地域ニーズの掘り起こしや既存プログラムの発展を図るとともに、関係人口による連携地域の活性化や新たなコミュニティづくりの推進につながる取り組みを実施する。

↓

夢まち創り大学で創出される関係人口と人材育成
～新たな地域連携活動の取り組み～

⇒　実施内容

- **（1）市内高校生等との連携による未来を担う人材の育成**
- **（2）新たなコミュニティづくりの推進**
- **（3）地域活動のサポート体制の強化**
- **（4）遠隔システムなどを用いた地域連携の展開**
- **（5）継続的な関係人口の構築と大学間交流に資する取り組みの充実**

（１）市内高校生等との連携による未来を担う人材の育成

大学×市内若者

市が運営委託する「京丹後市未来チャレンジ交流センター（roots）」を拠点とした、都市部学生と市内高校生等とのつながりを作ることで、未来世代の人材の育成につなげていく。

◆rootsとは？

高校生や若者が一緒になって未来のまちづくりのためのアイデアを出し合いながら、その企画やプロジェクト化に取り組むための支援施設。
ここを拠点に本市出身者を含め現役大学生や地域の事業者等も巻き込み、未来のまちづくりを一緒に考えたり、地域を知るための機会を創り出したりすることで、地元への愛着心を育て、将来のUターン者や関係人口の増加につなげていく。

roots

京丹後市未来チャレンジ交流センター

HP

Instagram

Facebook

（２）新たなコミュニティづくりの推進

大学×地域×コミュニティ

人口が減少しても地域活動をより活発にして、より暮らしやすい地域として「新たなコミュニティ」を作ることを推進するため、学生がファシリテーターやコーディネーターとして地域活動に参加し、地域の課題解決や魅力の再認識を進めていく

新たな地域コミュニティ

7．大学生との交流

○　佛教大学グローカル人材PBLとの連携事業
○　地域経済の活性化を目指し商品づくりなどに取り組む

◆新たな地域コミュニティとは？

将来に亘り元気で楽しく住みやすい地域を作っていくためには、まず行政区を越えた広域の範囲で連携し、課題を共有することが大切です。
その上で、若年層や女性など多様な方を巻き込みながら地域の活動人口を増やし、活動を多彩にしながら地域課題の解決に取り組んでいく必要があると考えます。
市ではその考え方を「新たな地域コミュニティ（新コミュ）」と称して、地域の課題解決に向けた取り組みを推進しています。

＜新たな地域コミュニティの活動イメージ＞
・誰もが関わりやすい地域活動の企画
・広域で取り組む防災訓練
・大学生と連携した特産品開発　　など・・・

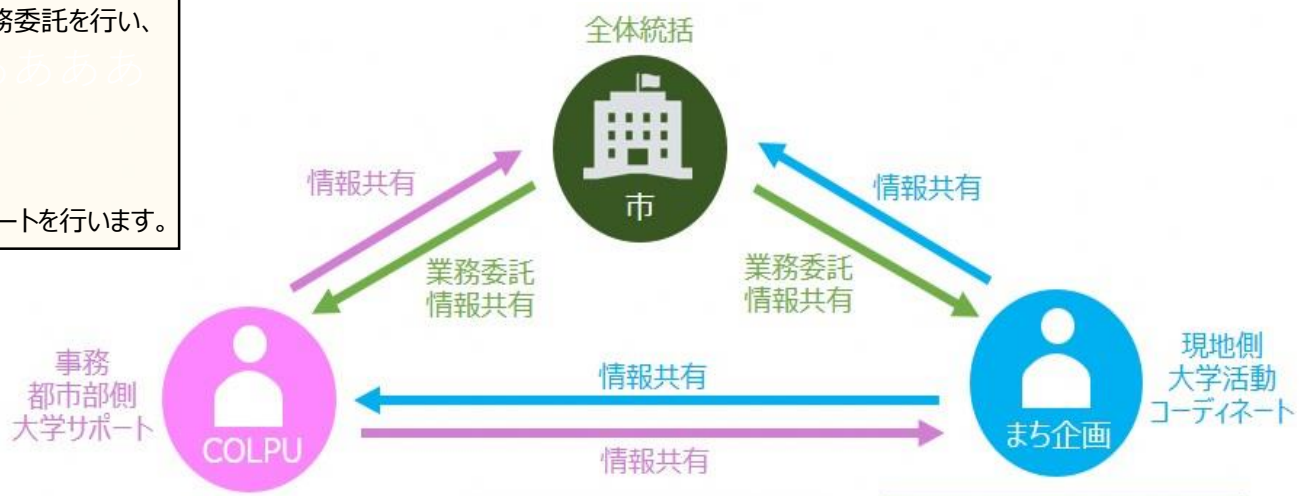
（３）地域活動のサポート体制の強化

事務局サポート体制の強化

まちの人事企画室に業務委託を行い、専門コーディネーターを配置し、
プロジェクトの実施や地域における活動をサポートする。
専門コーディネーターは随時、地域側と大学側との調整業務を行う。

◆３つの運営体制で大学の活動をサポート
令和3年度より、COLPU、まちの企画部に業務委託を行い、
地域側と都市部側でのサポート体制を構築。
都市部側・・・COLPU
地域側・・・まちの企画部
全体統括・・・市

必要に応じて、夢まち創り大学での活動のサポートを行います。



COLPU（事務・都市部サポート）	京丹後市（統括）	まちの企画部（現地コーディネート）
・各種書類の提出先	・事業全体を横断的に統括	・活動地や教員との調整、コーディネート
・総会などに関する各種調整	・夢大バスの予約、運行	・夢大バスの添乗
都市部側での大学サポート	・現地との調整→各市民局担当者	・シェアハウス利用に関する業務

京丹後市夢まち創り大学　事務局体制

（４）遠隔システムなどを用いた地域連携の展開

大学×オンライン×地域

◆ハイブリッド型フィールドワーク（HF)とは？
情報システムの活用によって現地活動・調査の負担を大学と地元双方で減らして、むしろ密度の高いフィールドワークによって双方により意味のある成果を獲得することができる新たな複合型のフィールドワークを「ハイブリッド型フィールドワーク」と呼び、令和５年度からは「研究会」に昇格させ議論を深める。
（ハイブリッド型フィールドワーク研究会を以下「HF研究会」と記載する）

<HF研究会の設置計画案>

①会員大学全体の参加・連携による研究会への展開
②HF懇話会で提起された研究課題の整理及び精査
③研究会成果のHF実践への応用
④会員大学間の連携を含む実践事例の拡張の検討）
⑤アンケート実施

◆検討課題
①会員大学全体が参加する研究会への展開の合意形成
②ハイブリッド型フィールドワークにおけるヒューマンコミュニケーションの質をどのように確保すべきか。
③現地活動が効率的に展開できる支援体制や支援拠点及び連携方法の確保・整備
④情報共有と実施事例の広がりと蓄積

（５）継続的な関係人口の構築と大学間交流に資する取り組みの充実

大学×大学　繋がれる場所づくり

夢まち創り大学学生に対する情報発信や働きかけをさらに強化するため、関係各所と連携のもと、京丹後市のイベント情報や採用情報、移住情報の発信などに取り組むことで、継続的な関係人口の構築を目指す。また、参加大学間での交流の推進、卒業生が情報を得られるプラットフォームとして夢まち創り大学Webサイトを作成する。

きょう、たんごが「好き」になる。

京丹後市職員採用サイト　Today We love Tango

※イメージ

→京丹後市に関する情報発信を行う
例）市内中高生との連携イベントや就職情報等

→夢大Webサイトでは、各大学の地域での取り組みの情報発信などを行い、大学間での情報交流を行うと共に、卒業生が継続的に活動情報を見られることで、大学卒業後も地域との関係を持ち続けられる

令和４年度

京丹後市夢まち創り大学

事業報告

京丹後市夢まち創り大学 令和４年度事業報告

【目次】

＜夢まちづくり大学活動実績＞
１-１　活動大学数
１-２　参加学生実績
１-３　バス利用実績
１-４　シェアハウス利用実績
１-５　拠点施設（旧郷小学校）利用実績
１-６　夢まちづくり大学学生証発行実績

＜大学等の市外の大学生を誘致した活動について＞
２-１　令和４年度プロジェクト計画一覧
2-2　各プロジェクトの取組み

＜夢まち創り大学活動実績＞

1-1　活動大学数

９団体（１３プログラム）【前年】１０団体（１６プログラム）

1-2　参加学生実績（申請のあったもののみ集計）

人／日合計　：７１７人【前年】４１３人　（算出方法：10 人が 3 日間活動した場合→のべ活動人数　30 人）

のべ活動人数　：５４３人【前年】３２２人

のべ活動日数　：５５日【前年】３７日

活動回数　　：４２回【前年】２７回

1-3　バス利用実績

総利用回数　：　３４回　　【前年】２６回

総利用人数　：　４５８人　　【前年】２５９人

年度途中でコロナ対策が緩和されたため、乗車定員を上限まで戻した。そのため、昨年に比べ、利用人数が大幅に増加した。

1-4　シェアハウス利用実績

	郷シェアハウス	久僧シェアハウス	湊宮シェアハウス	合計
総利用日数	1 日 (前年) 0 日	8 日 (前年)5 日	0 日 (前年) 0 日	9 日 (前年)5 日
総利用人数	18 人 (前年) 0 人	148 人 (前年)74 人	0 人 (前年) 0 人	166 人 (前年)74 人

※実績は一時利用日数・人数を集計（宿泊は前年同様不可）

バス利用人数の増加に伴い、シェアハウスの一時利用も増加した。

1-5　拠点施設（旧郷小学校）利用実績

総利用回数：1 日

総利用日数：18 人

1-6　夢まち創り大学学生証発行実績

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	教員・職員	合計
総発行数	8 人 (前年)5 人	55 人 (前年)65 人	42 人 (前年)41 人	8 人 (前年)3 人	1 人 (前年)4 人	114 人 (前年)118 人
累計発行数	1,307 人 (前年まで)1,194 人				59 人 (前年まで)58 人	1,366 人 (前年)1,252 人

1-7　電動自転車利用実績

総利用日数　：０日【前年】０日

総利用台数　：０台【前年】０台

今年度の電動自転車利用実績はない。

２-１．夢まちづくり大学プロジェクト計画一覧

今年度は大学の授業科目として１３プロジェクトが計画された。昨年度から継続された１３プロジェクトを実施した。

令和４年度夢まち創り大学プロジェクト一覧

No.	新規 継続	大学	担当教員 担当職員	活動地域	活動概要
1	継続	龍谷大学	谷垣岳人 准教授	大宮町 三重・森本	・「ひよせ」での生物調査とゲンゴロウ郷の米の農法の手引書更新 ・ゲンゴロウ郷の米の販路拡大のため、京丹後市のふるさと納税の返礼品として登録し、Yahoo ショッピングでの販売も開始
2	継続	龍谷大学	今里佳奈子　教授	京丹後市 宇川地域	・地域活動：宇川小学校の 6 年生の総合学習について、1 年間にわたり、授業の企画・運営 ・その他、金曜市のイベント企画（子ども対応）、水路の泥あげなどの地域活動 ・3 つのプロジェクト（今里田 PJ、情報発信 PJT、自然交流プロジェクト） ・調査・研究・提言活動：買い物環について全戸調査、移動販売等実態調査を行い、結果を踏まえ提案を行うと友に、調査報告書を全戸配付
3	継続	京都産業大学	若狭愛子　准教授	峰山町	・峰山町の魅力や情報発信のための PR 動画を作成 ・「こまねこまつり」で PR 動画の試写とアンケート実施
4	継続	大手前大学	谷村要　准教授	久美浜町 蒲井・旭	・久美浜町蒲井・旭地区における地域活性化に、メディア論や社会学の学びを活かす。 ・地区の地域活性化事業を映像記録として残すための活動を進めている。
5	継続	大手前大学	今福章代　教授	丹後ちりめん関係	・遠隔での京都府立織物・機械金属振興センターでの研修、事業所見学を行った。 ・古代の染織品の中で最も再現が困難といわれる紫根を使用した、高貴な色紫の再現実験を 2 か年で行う。
6	継続	大手前大学	本田直也　准教授	京丹後市 全体	・メディアや ICT を活用した情報整理と情報発信をテーマとし、Web 配信、SNS 発信、PR 動画制作などに取り組む。 ・京丹後市現地の魅力を発信するプロジェクト
7	継続	追手門学院大学	安本宗春　講師 佐藤敦信　准教授	弥栄町 和田野	・コロナとの共生社会を見据え、地域活動を通じた交流・連携の模索
8	継続	龍谷大学	石原凌河　准教授	大宮町 口大野区	・大宮町並びに口大野区の地域防災力と魅力向上を目的に、地域住民の方々と協働でコロナ禍での避難所運営マニュアルと避難所運営訓練のシナリオづくりと実施 ・口大野区の住民の方々と蕎麦の種蒔き、収穫、蕎麦の麺打ちに取り組み、住民の方々と交流
9	継続	京都文教大学	フィールドリサーチオフィス事務局	京丹後市 全域	・「京丹後市」で暮らす・働く・移住するについて学ぶ：「移住者」との交流（本学卒業生の I・U ターン者） ・丹後地域企業訪問 ・京丹後の魅力を発信する（ラジオ番組制作）」：FM たんご
10	継続	佛教大学	大東貢生　教授	丹後町 豊栄地域	・商品開発・魅力発信・花いっぱいの 3 つのプロジェクトに分かれ、豊栄地域で何ができるのかについて話し合いを行った ・現地での活動やオンライン活動において提案、成果報告会を実施
11	継続	大谷大学	鈴木寿志　教授	京丹後市 網野町 久美浜町	・浜詰での海岸清掃活動、環境保護の現状説明 ・海中浮遊、海浜砂中、魚内蔵中のマイクロプラスチックの調査。 ・除去装置の開発
12	継続	京都府立大学	松村千鶴　特任教授	㈱丹後王国ブルワリー ㈱野木源	・道の駅での就業体験を通した地方でのビジネス提案 ・農業体験を通した農業と地域活性化提案
13	継続	同志社大学	泉川大樹　講師	京丹後市 丹後町 間人地区	・京都府の北部に位置する京丹後市丹後町間人（たいざ）地区で、学生と地域の人々が協働して移住の仕組みづくりに取り組む

2-2 プロジェクトごとの取組詳細

取　組　番　号	1
大学名・科目名	龍谷大学政策学部(三重森本プロジェクト)
教員名・担当者名	谷垣岳人 准教授
対　象　地　区	大宮町三重・森本地区
活　動　年　数	8年目（平成27年度～）
目　的　・　趣　旨	地域住民と連携して、地域の自然資源の再発見、再評価を行う活動を通して地域農業、地域社会の活路を見出す。
活　動　概　要	2022 年度は、5 回のフィールドワークを実施した。水田に併設した生物の避難場所「ひよせ」の役割を調べるため現地で生物調査し、地域住民自らが生物調査できるように「生物調査シート」を改善し、ゲンゴロウ郷の米の農法に関する手引き書を更新した。ゲンゴロウ郷の米の販路拡大のため、京丹後市のふるさと納税の返礼品として登録し、Yahoo ショッピングでの販売も開始した。現地で最終報告会を行った。 ① ゲンゴロウ水田での生物調査 ② 直売所でのゲンゴロウ米の販売 ③ 地域での活動報告会
活　動　成　果	コロナ禍中であったが例年通りの意見交換や成果報告ができた。前期は日帰り訪問であったが、可能な限りの交流を行った。生物調査シート、手引き書の改善により、さらにゲンゴロウ郷の米に新規に取り組み易くなった。ゲンゴロウ米の生産に取り組む農業法人が増加し、地域の生産組合が地元小学校でゲンゴロウ郷の米に関する出前講義を行うなど地域の変化が見られた。
関係人口に関する効果	これまで本科目を受講した学生は京都・大阪など都市圏出身の学生が多く、京丹後市に複数回行くことによって、中山間地域の現状を認識し、地域課題の解決に向けた活動への関心が高まってきている。こうした中で、学部及び大学全体で京丹後市の認知度が年々向上してきている。

取　組　番　号	2
大学名・科目名	龍谷大学　政策学部「今里佳奈子ゼミ」
教員名・担当者名	今里佳奈子　教授
対　象　地　区	丹後町宇川地区
活　動　年　数	８年目（平成 27 年度～）
目　的　・　趣　旨	龍谷大学今里ゼミは、京丹後市宇川地区をフィールドに、「持続可能な地域社会のあり方」について自治・協働の観点から研究し、実践するゼミである。 活動の目的・ねらいは 3 つある。 ①具体的な地域活動を通して、地域に貢献すること。 ②地域と協働しながら、持続可能な地域社会に向け、課題解決型プロジェクトを進めること。 ③調査研究活動を通して、持続可能な地域社会のあり方について研究、提言すること。
活　動　概　要	①地域活動：宇川小学校の 6 年生の総合学習について、1 年間にわたり、授業の企画・運営を行った。その他、金曜市のイベント企画（子ども対応）、水路の泥あげなどの地域活動を行った。 ②3 つのプロジェクト（今里田 PJ、情報発信 PJT、自然交流プロジェクト）を進め、今里田での米、今里農園での野菜づくり、宇川の梅を利用した「宇川ジャム」の企画・開発・製造・販売、「宇川をかける」カレー缶詰の製造/販売、宇川 MAP(うかわさんぽ）の企画・制作、全戸配布、こどもたちとの自然交流イベントなどを行った。 ③調査・研究・提言活動：買い物環について全戸調査、移動販売等実態調査を行い、結果を踏まえ提案を行うと友に、調査報告書を全戸配付した。 ①　今里農園での野菜づくり ②宇川小学校子どもたちとの総合学習（ＦＷ） ③　梅ジャムの試作・あじみ体験 ④完成品

活　動　成　果	★コロナのため現地活動が思うようにすすめられない中でも、活動を進めることができた。 ①地域活動においては、総合学習の企画・運営に携わるという機会を得て、宇川小学校の子ども達との交流を深めるとともに、地域に根ざした教育についての考察を深めた。 ②プロジェクト活動では、予定通り全ての活動を行うことができ、それぞれのプロジェクトについて、次年度に向けて、新たなステップに進めることができるようになった。 ③調査・研究では、詳細な調査を行い、結果を住民に還元することができた。また、具体的な提案につなげることができた。
関係人口に関する効果	★大学では、文献、資料を読み、宇川・京丹後研究を行った。 ★日帰り、宿泊の FW のため、1 年間で 18 回、宇川を訪れた。また、リモートでのヒアリングや講義、アンケート調査を通して京丹後市、宇川地域への理解を深めた。 ★これらを通じ、参加者は、宇川・丹後町・京丹後市についての理解を深めると共に、「京丹後」に対して特別な想いを持つようになっている。

取　組　番　号	3
大学名・科目名	京都産業大学　　フィールドリサーチ
教員名・担当者名	若狭愛子　准教授
対　象　地　区	峰山地区（こまねこ祭実行委員会）
活　動　年　数	４年目（令和元年度～）
目　的　・　趣　旨	学生が行政及び住民との協働による地域づくりを体験する機会として、フィールド・リサーチの受講生が京丹後市峰山町の現地調査と持続可能な地域づくり提言を行う。
活　動　概　要	PR 動画の完成試写会を大学内と現地開催の「こまねこまつり」で実施 学内合同の発表会での活動内容の報告 福知山公立大学と交流会を実施 ①ポスター用撮影 ②こまねこまつり
活　動　成　果	PR 動画の完成・試写会の学内実施と現地開催の「こまねこまつり」で実施。学内合同発表会での報告。福知山公立大学と交流会を実施。
関係人口に関する効果	月イチ祭りやこまねこまつりへの参加、動画の素材収集のための街歩き、地域の方との交流（対面・オンラインとも）、動画の作成と提出、それに対する地域の方からのフィードバックを受けて、峰山町の魅力を感じるとともに情報発信の難しさを学んだ。

取　組　番　号	4
大学名・科目名	大手前大学　メディア芸術学部　　谷村要ゼミ
教員名・担当者名	谷村要　准教授
対　象　地　区	久美浜町蒲井・旭地区
活　動　年　数	9年目（平成 26 年度～）
目　的　・　趣　旨	久美浜町蒲井・旭地区における地域活性化に、メディア論や社会学の学びをどのように活かしていくか。これが谷村が指導するゼミがこの地区に関わる際のテーマである。2014 年以降、毎年アプローチを変えながら「学生の成長」とともに地域に資する活動を模索している。この 2 年ほどは、地区の地域活性化事業を映像記録として残すための活動を進めている。
活　動　概　要	夢まち創り大学の資源は利用しなかったものの、本学の学長特別教育研究費の活用や教員の自費負担で 5 月と 2 月の 2 回、蒲井・旭地区を訪れ、地域の景観などの撮影を行った。映像記録作品として完成は見ていないが、こちらの考えや現状について地域住民（風蘭の館側）に報告し、情報を共有している。 ＜映像資料を集める学生たち＞
活　動　成　果	風蘭の館の様子（提供される飲食物含む）や地域の景観の撮影を行った。幸い 2 月の訪問では、天気に恵まれたため、日の出の瞬間や美しい景観の映像撮影をすることができた。2023 年度に向けた映像素材をストックできたことが、今年度の成果といえる。
関係人口に関する効果	阪神間にある都市型大学に通っている学生にとっては、地方のリアル（特に地理上の不便さ、人口減少・少子高齢化）を目の当たりにすることで日本社会が有する課題に気づくきっかけとなっている。一部の卒業生は、この問題意識をより深める方向に自身の研究を進めたり（あるいは研究テーマを変更したり）、地域の方々との授業外での交流につながるようになった

取　組　番　号	5
大学名・科目名	大手前大学　メディア芸術学部　　今福章代ゼミ
教員名・担当者名	今福章代　教授
対　象　地　区	京丹後市丹後織物関係
活　動　年　数	６年目（平成 29 年度～）
目　的　・　趣　旨	【インターンシップ】※2018 年度からの継続 ・染色工芸を学ぶ学生達が、京丹後市の織物産業の事業所各社にてインターンシップを行う。 【丹後ちりめん活性化プロジェクト】※2017 年度からの継続 ・京都府織物・機械金属振興センター(府)での研修とインターンシップを今福ゼミ３年生対象に実施。時期を合わせて、4 年生ゼミ生を中心に、昨年度より京丹後市職員、地元関係者と実行委員会を立ち上げた「古代紫染色再現実験 in 丹後」の 2 か年計画のイベントとして、京丹後市の廃坑の小学校にて実施を予定している。京丹後市の機業に織を委託し、古代に近い丹後の織物を製作する。その生地を使用し、古代の染織品の中で最も再現が困難といわれる紫根を使用した、高貴な色紫の再現実験を 2 か年で行う。その理由は平安時代の文献延喜式の中に。丹後国より白生地が貢納されたことが記述されており、古代の染色と深い関係がわかる。学生の古代の染色を体験させる絶好の機会であり、一般の方や織物産業の方々、地域の子どもたちに丹後の絹織物の歴史の深さを再認識できる場を作り、丹後ちりめんの活性化につなげていくことが目的である。
活　動　概　要	7 月京都府立織物機械金属振興センターより遠隔研修 8 月 23 日 京都府立織物機械金属振興センターで昼食休憩及び施設見学 8 月 23 日から 24 日 短期インターンシップの実施 田勇機業株式会社　学生 3 名 養父織物　学生 3 名 8 月 25 日 農産廃棄物の収集＆染料抽出作業　梅本農場、日下部農場、ファームガーデン空詩土 染料の抽出作業の場所は大宮町のアグリセンター 9 月以降　秋学期　ゼミナールの授業にて農産廃棄物から抽出した染液にて染色実験を実施 ①　丹後ちりめんの研修　　②インターンシップ

	③収穫したブルーベリー ④農産廃棄物からの抽出作業
活　動　成　果	今年の丹後ちりめん活性化プロジェクトでは、SDG s として、農産廃棄物による染色実験を行っている。地域の農場に行き、実際に農場の状況を見学し、また、ファームガーデンではブルーベリーの収穫をお手伝いした。収穫したものを、水洗い、抽出するための加工作業など、市販の植物染料の扱いでわからない、手間や難しさを、農場の仕事の合間に、廃棄物を集める時間や人手の確保の問題など、多くの問題が見えた。 秋学期は、ゼミナールの学生７名は商品開発のプロジェクトとして、農業廃棄物を使用した染色実験を行った。 　学生たちはインターンシップや研修、実験を通して、染織産業の現状や今後について考え学ぶ機会を得ることができた。また、新型コロナの影響で、不自由な学生生活を感じている学生が、それでもなお、自分たちを受け入れ、学ばせていただけたことで、このような状況だからこそ大きな感謝と喜びを感じることができた。 実現化には大きな問題があるが、特産物を含む、京丹後市の農産廃棄物から染色をすることが可能であることが確かめられた。
関係人口に関する効果	学生たちは遠隔もしくは現地での研修、事業所見学を通して丹後ちりめんについて深く学習し、京丹後市における織物産業の現状を理解した。日本の染織産業に於いて、丹後の織物が重要なポジションに位置していることを考え、自分たちにできることは何か、考えるきっかけとなった。

取　組　番　号	6
大学名・科目名	大手前大学　地域貢献 PBL
教員名・担当者名	本田直也　准教授
対　象　地　区	京丹後市内全域
活　動　年　数	5年目（平成 30 年度～）
目　的　・　趣　旨	所属学部、専攻、学年が混在する多様な学生たちから編成される 20 人のクラスにて、フィールドワークを伴う課題解決型学習、プロジェクト型学習を行う。様々な経験の違いと専門性の違いをうまく融合しながら、チームビルディングを通して課題解決を行う。 専門性は、メディア系、社会科学系、情報技術系、芸術系、人文系など幅広く、大学で学んだそれらの力を活かしながら多様な地域の課題解決に挑戦していく。
活　動　概　要	本学学内での研修 2 日間と京丹後市現地でのフィールドワーク 1 泊 2 日で構成される夏期集中講義形の総合科目授業として、学部学年混成クラスにて課題解決型学習に取り組んだ。メディアや ICT を活用した情報整理と情報発信をテーマとし、Web 配信、SNS 発信、PR 動画制作などに取り組み、京丹後市現地の魅力を発信するプロジェクトに取り組んだ。 ＜研修の様子＞
活　動　成　果	峰山町の吉翠苑に宿泊し、峰山地区を中心とした近隣の散策、網野地区の京丹後市夢まち創り大学の訪問、レンタカーを利用した弥栄、琴引、久美浜などの散策を行い、京丹後各地を訪問とデータ収集を行った。1 泊 2 日の体験とデータ収集をふまえて、本学帰着後には学生たちグループによる様々な情報発信の方法を企画し、一部実現することができた。SNS 発信の企画書と具体案、京丹後をイメージしたオリジナル音楽やプロモーションビデオの制作など、学生視点による様々な成果物が得られた。京丹後市での成果報告会を実施したかったが、令和 4 年度には実施できないまま活動を終え、次年度に引き継ぐこととなった。
関係人口に関する効果	参加する学生たちにとって京丹後市は、知らない、イメージ沸かない地域であったが、繰り返し訪れてこの地域のために何かに取り組みたいという気持ちへと変わっていった。自然溢れる中での新鮮な活動や、何もないからこそ何かに集中して打ち込める場に興味を持ち、一部の学生たちは繰り返し研修に参加したり、西宮に持ち帰って地域貢献の課題に取り組む姿勢へと変化しつつある。

取　組　番　号	7
大学名・科目名	追手門学院大学　地域創造学部「地域創造実践演習」
教員名・担当者名	安本宗春　講師、佐藤敦信　准教授
対　象　地　区	弥栄町和田野地区
活　動　年　数	５年目（平成 30 年～）
目　的　・　趣　旨	コロナとの共生社会を見据え、地域活動を通じた交流・連携の模索
活　動　概　要	11 月 27 日に訪問し、朝市の視察、交流を実施した。
活　動　成　果	和田野区報への投稿と掲載
関係人口に関する効果	2022 年に現地を訪問した。オンラインでの交流時と比べて、学生たちのモチベーションを高め地域に対する理解を深めることができた。

取　組　番　号	8
大学名・科目名	龍谷大学　政策学部　　政策実践・探求演習ＩＡ（国内）
教員名・担当者名	石原凌河　准教授
対　象　地　区	京丹後市大宮町（全体）／大宮町口大野地区
活　動　年　数	５年目（平成 30 年度～）
目　的　・　趣　旨	未曾有の大災害が全国各地を襲い、自然災害による被害が後をたたない。持続可能な地域づくりを考える上で、地震や風水害への備えを平時から検討することが不可欠である。そのためには、防災や復興に関する専門知と大学生等の若手人材を有する大学と、防災活動に関心があるフィールドを有する地域とが連携して取り組むことが有用である。大学側においては、大学生自身が地域に継続的に関わることで、地域防災活動の担い手としての素養を育成することを狙いとする。
活　動　概　要	大宮町並びに口大野区の地域防災力と魅力向上を目的に、地域住民の方々と協働でコロナ禍での避難所運営マニュアルと避難所運営訓練のシナリオづくりについて検討するとともに、実際に避難所運営訓練を企画・運営を行った。また、口大野区の住民の方々と蕎麦の種蒔き、収穫、蕎麦の麺打ちに取り組み、住民の方々と交流を深めた。 ①避難所運営マニュアル検討会の様子　　②避難所運営訓練の様子 ③蕎麦の種の収穫作業　　④蕎麦打ち
活　動　成　果	大学生が地域に入り、地域の方々と交流する中で、地域の方々は、若者・外部の視点から地域を知ることができ、普段とは異なる視点から地域を捉えられたと考えられる。 コロナ禍での避難所運営訓練のシナリオづくりや訓練の運営を通じて、地域の課題に気づき、対策や意識向上の必要性の啓発につなかった。こうした取り組みを通して、地域の防災力向上に寄与したと考えられる。
関係人口に関する効果	当初は京丹後市を単なる田舎の一地域として捉えていたものが、関わりが深まるにつれて、京丹後市の具体的な地名や関わっている人々などの具体的な名称が聞かれるようになった。また、当初は京丹後のイメージが思いつかない参加者も多かったが、活動を通じて、多くの参加者が京丹後市を「第二の故郷」として捉えるようになった。

取　組　番　号	9
大学名・科目名	京都文教大学　　プロジェクト科目（地域）
教員名・担当者名	ﾌｨｰﾙﾄﾞﾘｻｰﾁｵﾌｨｽ事務局
対　象　地　区	京丹後市全域（主に峰山町、大宮町、網野町地区）
活　動　年　数	６年目（平成 29 年度～）
目　的　・　趣　旨	現代の日本社会では、人口減少で消滅の危機にさらされる可能性のある自治体が数多く存在している。こうした状況の中で人口減少を食い止めるために様々な取り組みが行われている。この科目では、京都府北部地域をフィールドに地元企業への訪問や企業経営者、移住して来た方に対してインタビューや参与観察などを用いた調査を行い、京都府北部地域の現状と課題および魅力について考え、得られた調査結果を報告書にまとめてプレゼンテーションを行う。
活　動　概　要	①　「京丹後の魅力発信」に関するラジオ番組制作を行うにあたり、NPO 法人京丹後コミュニティ放送（FM たんご）にて取材のポイントなどに関するレクチャーを受ける ② 京丹後市職員から、京丹後市の概要や政策、地域振興事業などについてレクチャーを受ける ③「京丹後市」で暮らす・働く・移住するについて学ぶ：「移住者」との交流（j 本学卒業生の I・U ターン者） ④ 丹後地域企業訪問：　（株）シオノ鋳工（本学卒業生勤務先）、吉翠苑 ⑤ 京丹後の魅力を発信する（ラジオ番組制作）」：FM たんご ⑥ 丹後地域の景勝地を訪問：　夕日ヶ浦海岸、天橋立 ①I・U ターン者との交流 ②企業訪問 ③ラジオ番組の制作・発信（放送） ④観光の魅力体感
活　動　成　果	① ラジオ番組制作を制作するにあたり、地域の魅力や地域企業の価値について、 地域の人々や学生同士のグループ活動を通じて意見を集約し、互いの意見を尊重し、協働で番組制作を進めることが

	できた ② 現地にて、直接担当者や当事者から話を聞くことで、「地方」の現状を把握し、自身が普段生活するコミュニティとの比較をし、行政、産業、教育など社会生活における 課題や状況を俯瞰的に捉えることができた ③ 地域における学生教育や本学の専門性を活かした研究の成果を「ラジオ番組」という媒体を使って地域に還元することができた ④ フィールドワーク終了後に、地域で企画、開催、実施している事業やイベント等の情報周知や場の提供を行った ⑤ 今回のフィールドワークを通じて「京丹後」というまちに魅力を感じ、「再訪したい」という学生が数名いた。（過去にも同様のケースがあり、実際にＩターン就職をした卒業生の事例実績もある〔上項④参照〕）。
関係人口に関する効果	単なる地元企業や行政の概要説明にとどまらず、京丹後市で生活する多種多様な方々に登場していただき、それぞれの想いや熱の入った話を聞くことで、「京丹後のこと」についてより深く学び、体感してもらうことができた。特に今年度は「移住者」を本学卒業生で揃えたということもあり、親近感をもって参加してもらえた。

取　組　番　号	10
大学名・科目名	佛教大学「グローカル人材 PBL」
教員名・担当者名	大東貢生　教授
対　象　地　区	京丹後町大山・豊栄地区
活　動　年　数	４年目（令和元年度～）
目　的　・　趣　旨	地方創生の必要性が叫ばれる中、持続可能な地域づくりの実現には、多様なステイクスホルダーが一体となり経営の視点を持ちながら、実践的な取り組みを行うことが重要である。この活動は、地域（豊栄連合区、まちづくり委員会）、企業（野木源、岩木ファーム、いちがお畜産）、大学が一体となり、地域課題の解決に取り組むものである。この取り組みを通して、大学側では地域社会に根付きつつ、グローバル経済の荒波を読み切る能力を持ったグローカル人材の育成を目指し、地域側では H31 年度末で廃校になった小学校を活用した地域振興を目指していく。
活　動　概　要	・月一回の豊栄まちづくり委員会とのオンラインミーティングを行い活動を進めた。 5～10 月：豊栄地区まちづくり委員会とオンラインで打ち合わせを行い、商品開発・魅力発信・花いっぱいの 3 つのプロジェクトに分かれ、豊栄地域で何ができるのかについて話し合いを行った。また話し合ったことに基づき、プロジェクトごとに提案を検討した。 11 月：現地にてプロジェクトごとに活動を行った。また豊栄地区文化祭にて中間報告を行った。 12・1 月：中間報告に対する意見に基づき、提案の改善を行った。 2 月：成果報告会を行い、学生の提案に対する意見をいただいた。 ①　豊栄まちづくり委員会との打合せ ②商品開発プロジェクト試食会 ③文化祭のため夢アート作成 ④成果報告会の様子

活　動　成　果	①豊栄地域に大学生（都会の若者たち）が入り込むことによって、特に地域に居住する若手が豊栄地域の未来を考えて、商品開発・魅力発信・ふれあいの３つのプロジェクトを発足させ、学生の提案を受けつつ、柿の加工品の商品化、子どもたち中心のワークショップの開催、夢アートの作成等に取り組んだ。 ②学生の活動と同時進行して立ち上がった豊栄地区まちづくり委員会が、学生の提案を受けつつ、地域計画（まちづくりヴィジョン）作成を行い、豊栄まちづくり協議会として新たに活動を開始した。
関係人口に関する効果	京丹後市の産業を見ることで、学生は地方には地方独自の産業の活性化や生き残りの方法があり、地方から世界へとつながる活動について理解が深まった。同時に、都市部とは異なる地方での生活について体験を行い、学生から見た地方の問題についても認識を新たにした。

取　組　番　号	１１
大学名・科目名	大谷大学「プロジェクト研究実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「卒業研究」
教員名・担当者名	鈴木寿志　教授
対　象　地　区	京丹後市網野町・久美浜町
活　動　年　数	３年目（令和２年度～）
目　的　・　趣　旨	１）海浜漂着プラスチックごみ問題の現状を把握し、解決策を考える。 ２）地元の方々と協力し、海岸の清掃活動を行い、網野町の海浜環境を改善する。 ３）マイクロプラスチック除去装置を考案し、これまでの清掃活動では除去しきれていないマイクロプラスチックを取り除く装置を開発する。
活　動　概　要	5 月 15 日と 7 月 10 日、および 11 月 6 日と 12 月 4 日に、班に分かれて以下の活動を行なった。遊漁港での魚の内臓のマイクロプラスチック調査、琴引浜～小浜マブ川における海浜漂着ごみの国由来調査、琴引浜と箱石浜の砂に含まれるマイクロプラスチックの調査、小浜におけるマイクロプラスチック除去装置２種の実地試運転。 ①マブ川清掃で回収された漂着物 ②浮遊型マイクロプラスチック装置の除去装置試運転 ③遊漁港での魚調査 ④掻きあげ型マイクロプラスチック除去装置作業風景
活　動　成　果	令和４年度の活動では、遊漁港で釣ったカサゴ２尾とムラソイ１尾の内臓からそれぞれマイクロプラスチックが検出された。漂着ごみの国由来調査は、マブ川と箱石浜で行い、冬季に中国のペットボトルが増加する傾向が分かった。砂に含まれるマイクロプラスチック調査では、夏の琴引浜の砂にマイクロプラスチックがほとんど含まれていなかったのに対し、冬に増加することが明らかになった。マイクロプラスチックの除去装置開発では、海水浮遊型と掻きあげ型を開発した。後者は NHK のニュース番組の取材を受け、今後の取り組みが期待された（NHK 京都放送局「こえきく」2022 年 11 月 24 日放送）。

関係人口に関する効果	これまで丹後半島を訪れたことのなかった学生がほとんどであり、また日本海側の海の実態についても初めて知った学生が多い。実際に訪れたことで、砂浜が非常に汚れており、大きな環境問題であることが理解された。また最終処分場がただのごみ捨て場であることから、焼却するなどの抜本的解決が必要という認識が生まれた。

取　組　番　号	１２
大学名・科目名	京都府立大学
教員名・担当者名	松村千鶴　特任教授
対　象　地　区	①（株）丹後王国ブルワリー　②（株）野木源
活　動　年　数	６年目（平成２９年度～）
目　的　・　趣　旨	①ビジネスマインドを養い地域社会に貢献する生き方・働き方を考えるため、道の駅で就業体験を行い、現場の事例を用いたＰＢＬを行う。 ②農業体験を通して地域社会の特性や農業の６次産業化を理解し、今後の農業を通した地域活性化について考える。
活　動　概　要	①ケースメソッド・キャリア演習インターンシップ型（４泊５日）㈱丹後王国ブルワリー ＜活動テーマ＞　道の駅での就業体験を通した地方でのビジネス提案 ＜演習内容＞　事前打ち合わせ７月オンライン １日目：8/19 オリエンテーション 2～4 日目：8/20,21,22　職場体験（農業・食品加工等） 夜は企画プレゼン作成 5 日目：8/23 活動報告会においてプレゼンテーションを行う。 ②ケースメソッド・キャリア演習インターンシップ型(2 泊 3 日＋オンライン）㈱野木源 ＜活動テーマ＞農業体験を通した農業と地域活性化提案 ＜演習内容＞　事前打ち合わせ・課題発表８月オンライン 1 日目：9/2　オリエンテーション・食品加工体験 2・3 日目：9/3,4　農業体験（農作業・視察・講演等）　夜はプレゼン作成 3 日目午後：9/4　農業を通した地域活性化についてプレゼン・協議 ①　コンニャクマンナンライスとコメとの美味しいバランスを探す実験 ②　米俵の移動　　③メロン畑の杭はずし

活　動　成　果	コロナの影響を受け、一部内容の縮小があったが、概ね授業のねらいを達成することができた。宿泊を伴う就業体験を通して地域のよさ(自然・人との関りや食べ物の美味しさなど)を体感するとともに、地域活性化の具体策について検討することを通して地域理解が深まった。当該企業の方を通して学生と地域の生産者さんたちとの間でも意見交流をすることができた。
関係人口に関する効果	＜学生レポート抜粋＞京丹後市には近くに海があり、山があり、人のぬくもりがありとても良い場所であると感じた。地元の丹波篠山市と地域は違うものの同じような課題を抱えていることを知った。一番大きな課題は人手不足と高齢化である。その中で私が強く感じたのは現実の厳しさ、多種多様な視点の必要性、人とつながることの大切さである。私が今回課題解決のために提案した解決策もまだまだ理想に過ぎない。実行するにはもっと現場に踏み込み、地域の現状を知り、農業の現状を知る必要がある。そのためには自分自身様々な視点から物事を見る必要もあるし、より多くの人の視点も必要になってくる。より多くの人たちの協力を得るためには人との繋がりを大切にする必要がある。私が今回強く感じた三つの大切なことは密接に関係している。これらのことを知れたのは私にとって非常に大きな成長であった。

取組番号	１３
大学名・科目名	同志社大学「プロジェクト科目」
教員名・担当者名	泉川大樹　講師
対　象　地　区	京丹後市丹後町間人地区
活　動　年　数	２年目（令和３年度～）
目　的　・　趣　旨	本プロジェクトは、京都府　京丹後市　間人（たいざ）地区（人口 1,728 人、高齢者割合 44.2%、全国平均+15.8%）を舞台として、学生が地域の人々と協力して間人が移住者に選ばれる地域になるための仕組みを立案し、実行することで、間人地域のコミュニティをよりよい形で維持・発展させることを目的として活動している。
活　動　概　要	・現地での地域住民へのヒアリング（4 月、6 月） ・京丹後市長への活動報告（2 月） ・ワークショップ「寄ってたかってたいざ」開催（7 月） ・「まるっぽ間人ウォークラリー」、「第 2 回寄ってたかってたいざ」開催（12 月） ①ワークショップの様子 ②ウォークラリーの様子
活　動　成　果	事前準備・当日運営を行い、イベントを成功させることができた。また、ウォークラリーを通して、住民同士の交流のきっかけをつくるとともに、地域の魅力を改めて感じてもらう事ができ、「内から愛されるまち」の実現に一歩近づくことができた。 (2)幅広い層の住民へのアプローチで、多くの住民がまちづくりに携わったこと。 計 5 回のイベントで延べ 144 人の幅広い年齢層の住民と協働してイベントを実現できた。 今まで活動に参加していなかった層にアプローチでき、多くの住民が町づくり活動に携わるきっかけをつくった。 (3)移住者・住民双方の視点からの理想のまちを構想したこと。 「未来の移住者目線から住みやすいまち」・「住民が理想とする 10 年後の理想のまち」を考え、共通項を探し出すことで、移住者住民双方にとっての理想の間人を構想した。
関係人口に関する効果	京丹後市の住民へのヒアリングやワークショップを重ねたことで、地域が真に解くべき課題について、考察を深め、具体的なアクションに繋げることができました。